



存問自在——高浜虚子の晩年 深見けん二

昭和三十年から三十四年に至る虚子先生最晩年の句に次のような句がある。

子規と短かき日その後永き日も
星一つ命燃えつゝ流れけり
わが庵の椿に鶉の来る日課
春山を相して京に都せりと
夏山の襟を正して最上川
蜘蛛に生れ網をかけねばならぬかな
曉鳥文庫内灘秋の風
伊予に生れ相模に老いて更衣
香水に孤高の香りあらまほし
幹にちよと花簪のやうな花

虚子は三十年四月から、それまで続けてきた朝日俳壇の選句に新聞社の要望で小俳話をのせることとなり、三十四年四月八日の遠逝まで続け、百三章に及んだ。これが「虚子俳

はこの中からあげてよい気持がした。前掲十句のうち初めの一句（「虚子俳話」以前）以外は「虚子俳話」に併載された近作からの句である。

子規と短かき日その後永き日も

ホトトギス七百号回顧として、ホトトギス三十年四月号巻頭にある。その前年秋、文化勲章を受け、老いても子規を宗としていた。

星一つ命燃えつゝ流れけり

三十年九月九日十一日と句日記に流れ星の句併せて十二句ある。流れ星の季題で心は自由に遊び、流れ星と一つの命となっている。

わが庵の椿に鶉の来る日課

三十一年二月二十八日。虚子庵には先生の好きな山椿が多くあった。その椿に鶉が毎日来、虚子は俳小屋で毎日仕事をこつつけた。

春山を相して京に都せりと

京都の地を生涯愛した。三月二十五日、京都に在り、美しい春山の姿を見て、昔占部の言を入れ帝が都をここに定めたものとした。

夏山の襟を正して最上川

羽黒山詣を六月にした時、猿羽根峠に行き、左右に重なる夏山の美しさを格調高く詠んだ。「奥の細道」を読み返し出かけている。

話」で、ここに平明簡潔にしかもあまねく、俳句への考えが述べられている。当時星野立子主宰「玉藻」に毎月研究座談会という、立子とともに虚子を囲む座談会記事がのせられており、故上野泰、故湯浅桃邑、清崎敏郎、藤松遊子と共にそのメンバーであった私は、隔週の朝日俳壇の「虚子俳話」に何が載るかを興奮して待ち読んだものである。その第一回は「俳句は季題の詩」であって、その後も「季題を最も活用する詩」「季題は俳句の基礎」「季題の軽視も許さぬ」のごとく、俳句は花鳥諷詠、即ち季題の詩であるということに最も重点が置かれた。また描写については題目としては一回であったが、「単純化具象化」という俳話が、ホトトギス以外の俳句を具体的に座談会で何ったすぐ後に出了。

「虚子俳話」には近作三句がのせられ、これは、俳話とはなんの関係もないものと虚子はいっており、勿論一つ一つの俳話と対応するものでないが、今回あらためて全体の三百句余りを読むと、自ずと俳話と表裏をなし、また最晩年の俳句

蜘蛛に生れ網をかけねばならぬかな

七月十七日、鹿野山神野寺稽古会。宇宙の生命の宿命をそのまま受け入れる虚子の生命感が、季題「蜘蛛」の描写に自ずと現れた句。

曉鳥文庫内灘秋の風

若い時から親交があり後に北安田の聖人と呼ばれた浄土真宗の高僧曉鳥敏の蔵書が没後金沢大学に寄贈された。それを虚子は訪ね、つづいて基地闘争生々しかった内灘を見、過ぎ去るものへの深い感慨を秋風に託した。

伊予に生れ相模に老いて更衣

三十二年作。伊予松山に明治七年生れ西ノ下に育った。鎌倉に移ったのは明治四十三年、ここを終の住処とした。今年もする更衣。

香水に孤高の香りあらまほし

三十三年八月、「玉藻」の夏行句会に三日間六回つづけて出席、兼題の作。平凡、日常の詩の中に、香水に望む孤高品格。

幹にちよと花簪のやうな花

三十四年四月四日、「虚子俳話」近作最後の句、庭先の桜の幹に小さく咲き出た花を花簪と言った、夫人の言葉がそのまま句となり、そこにまた宇宙の生命の火が宿っている。

「虚子俳話」の一章に、「生活の記録」があり、「句日記」は「生活の記録ではあるけれども、それは唯の記録ではな

い。春夏秋冬の現象を透しての生活の記録である。」と記している。「句日記」は昭和五年から五年ごとにまとめられているが、今回昭和十年、二十一年、三十二年の句日記を比較してみた。その各年の句数、句会数、旅は次の如く多い。

昭和十年。四八三句・句会数約一六〇・旅（四月京阪松山名古屋、十月松山京阪、十二月京都）虚子六十一歳。

昭和二十一年。七八七句・句会約一一五・旅（六百号記念

——九月下部新潟秋田能代直江津、十月金沢三國京都名古屋、十一月京阪四国九州各地）虚子七十二歳。

昭和三十三年。六三〇句・句会約八〇・旅（四月金沢、五月新潟、七月八月鹿野山山中湖畔稽古会、十月京都敦賀）

まず昭和十年、二十一年の五句と特記すべきことを記してみよう。

戴入の田舎の月の明るさよ [昭和十年]

一月十日。第二回同人会。赤羽橋春岳寮。

椿先づ揺れて見せたる春の風

四月二十日。あふひ還暦祝。百花園。

道のべに阿波の通路の墓あはれ

四月二十五日。風早西の下の句碑を見、鹿島に遊ぶ。松山、野津邸。松山ホトトギス会。

大空に羽子の白妙とどまれり

十二月十三日。草樹会。丸ビル集會室。

観音は近づきやすし除夜詣

十二月三十一日。浅草観音。

あの『五百句』はこの除夜詣の句で終っている。前年虚子は還暦を迎え、名著『新歳時記』を編集発行した。九年から十年にかけ初めての『虚子全集』が発刊され、また俳句観の集大成であり美事な俳句史『俳句読本』は十月刊。この時期はそれまでの俳句の完成円熟の句境である。

日凍てゝ空にかゝるといふのみぞ [昭和十年]

一月十三日。稽古会つゞき。小諸山麓。

初蝶来何色と問ふ黄と答ふ

三月二十九日。高浪、竜由来る。小諸山麓。

螢火の鞠の如しやはね上り

五月三十一日。ホトトギス六百号小諸記念句会（六月二日）の兼題を作る。小諸山麓。

秋灯や夫婦互に無き如く

八月十四日。稽古会、第六日。小諸山麓。

父を恋ふ心小春の日に似たる

十一月十八日。立花邸におけるホトトギス六百号記念柳川俳句会を終へ、久留米いかだ小句会。一泊。（筆者註、秋月に父曾遊の跡を訪ねている。）

昭和十九年から二十二年までの所謂小諸時代である。稽古会の初めは二十年十二月よりこの年二月まで毎週土日、上野泰、立子と共に数名で三七回つづけたもの。二十一年十二月ホトトギスは六百号に達し、戦後のあの時代、各地記念会に難路を冒し出席した。『小諸百句』『小諸雑記』が出版され、二十二年一月号の『苦楽』に名作『虹』が発表された。座談会で私共に複細胞の写生文といったが世に小説という。つづ

いて一連の虹もの、「椿子物語」「絵巻物」などの写生文が出た。小諸の地に触発され、終戦を機にさらに詩囊が花咲いた新しい闘志を感じる句境である。

昭和三十三年は「虚子俳話」を書かれた最晩年の時期、その五月五日の章に「毅然たれ」があり、「主として人事社会を詠はんとすれば、これを他の文芸に譲るがよい。他の文芸になく、独り俳句にのみある四季諷詠、自然諷詠の長所を守れ。」と結んである。句日記から六句を抽出する。

牡丹の一瓣垂れし飴の如

伊予に生れ相模に老いて更衣

昼寝する我と逆さに蠅叩

風生と死の話して涼しさよ

秋風にもし色あらば色ヶ浜

我庭や冬日健康冬木健康

〈牡丹〉の句は四月二十一日私共の新人句会、虚子庵。会者十名、庭先に数株の牡丹。濃い臘脂色の黒牡丹の崩れかかった一弁。〈昼寝〉の句は鹿野山神野寺稽古会、寺苑の棕櫚で作った蠅叩を愛用した。それを傍の昼寝。ホトトギス消息に「稽古会を催さうと思つて居る。それは諸君の爲め、と云ふよりも寧ろ私の爲である。」とあり、小諸に始まった稽古会は、年々の東西若者の稽古会となり、更に数日に及ぶ各句会の連続の稽古会となった。この年は七月十三日〜十六日鹿野山、七月二十九日〜八月四日山中湖畔、句会併せて十八回、句日記の句一五九句。〈風生と〉はその山中湖畔のもの。〈秋

風に〉は十月敦賀へ旅をされた時、「玉藻」に虚子の「敦賀行」という文章があり、芭蕉の奥の細道の跡を訪ね、芭蕉忌を修している。この文章も「虹」の愛子が三國から敦賀まで虚子を送ってきた時の印象から始まって美しい。〈我庭や〉は自らの心の健康を庭の冬日、冬木に托したもの、「……御左右御伺ひまで」という存問の手紙に対する答えである。かくこの一年の句日記を通読すると、虚子の日々の生活は、自然と共に動き、自然を描くことは即虚子の心であった。貫く棒の如きものは少しもゆるがないが、力みもゆるみもなく、この年棹尾の「虚子俳話」が「存問」であることも印象深い。

「……お寒うございます、お暑うございます。日常の存問が即ち俳句である。」

『虚子俳話』（三十三年刊）の巻頭にある丹前姿の鳳眼の笑顔。あのふだん着の姿と心で虚子晩年の俳句は、四季の自然並びに人間に対して全く存問自在であった。

俳句実作の好伴侶、俳人必携の書

現代俳句用語表現辞典

三谷 昭編

定価 三四〇〇円（送料二五〇円）

富士見書房